

ある晩、子供たちが寝静まつてから、お雪は行燈^{あんどん}のかげで針仕事をしていた。すると、巳之吉は、そんな彼女を見ながらいった。

「お前が、そうやって顔にあかりをうけて、針仕事をしているのを見ると、わしは十八の年にあった、不思議なことが思い出される。そのとき、わしは、いまのお前のように、美しい、色の白い女^{ひと}を見たのだ——ほんとに、その女^{ひと}は、おまえにそっくりだった」

仕事から目をはなさずに、お雪は答えた。

「その女^{ひと}の話をしてくださいな。……どこでお会いになられたの？」

そこで巳之吉は、あの渡し守の小屋の恐ろしい一夜のことを——それから、につこりささやきながら、自分のうえに身をかがめた白い女のことを——それから、茂作じいやのひっそり死んだことを話した。そして、彼はいった。

「眠っているあいだも、起きているときも、お前のように美しい人を見たのは、その時だけだ。もちろん、あの女^{ひと}は人間ではない。わたしは、その女^{ひと}が怖かった——ほんとに怖かった——しかし、まっ白だったよ！……じっさい、わしの見たのは、夢だったのか、雪おんなだったのか、よくわからんのだが」

お雪は、いきなり針仕事を投げ出して、立ち上がり、坐^{すわ}っている巳之吉のうえに身をかがめて、彼の顔にむかって叫んだ。

「それは、あたし——あたし——あたしなの！ この雪だったのです！ あのととき、わたしは、もしあなたがそのことをひと言でも洩^もらしたら殺す、と申しました！……そこに眠っている子供がなかったら、すぐにいま、あなたを殺したところです！ ですから、よく、ほんとによく子供たちのことをみてやってください。もし、子供たちにとにかく言われるようなことをなさったら、わたしは相応なことをいたしますから！」

こう叫んでいるあいだも、彼女の声は、風のむせぶ声のように、しだいに細くなった――

―それから、きらきらした白い霧になって、梁はりのほうへ昇って行き、震えながら、煙出しを抜けて行った。……もうそれきり、彼女のすがたは二度と見られなかった。